

「賀茂川筋絵図」の作成年代確定と災害とのかかわり

吉越 昭久*・片平 博文*・赤石 直美**・塚本 章宏***・麻生 将****・
小畑 貴博***・亀井 千尋***・中瀬 聡****・渡邊 泰崇*****

I. 問題の所在

京都の鴨川を描いた1葉の近世絵図(「賀茂川筋絵図」)が、京都市歴史資料館に所蔵されている。その作成年代は不明であるが、これまでの研究では、鴨川の「寛文新堤」建設に伴って作成された絵図であるとみなされてきた¹⁾。従って、作成年代も寛文10(1670)年頃であると考えられてきたが、その根拠は必ずしも明確ではない。

ところが、「賀茂川筋絵図」の記載内容をよくみると、明らかに作成年代をもっと後の時期に訂正しなければならぬ人名などの事項があることがわかり、改めてその作成年代を検討する必要性がでてきた。そこで、その作成年代に関する再検討を行うこととした。「賀茂川筋絵図」の作成年代が確定されれば、作成に至った時代背景や目的、さらに災害とのかかわりについても検討を進めることができるようになり、鴨川研究が大きく前進することが期待される。

ところで、本稿執筆の経緯について、若干触れておきたい。立命館大学では、2003年度に文部科学省の21世紀COEプログラムに「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」という研究テーマが採択された。このプログラムでは、構成メンバーによって研究を実施するだけでなく、大学院教育も重要な意義をもつものとされている。このため、大学院文学研究科では採択初年度の後期より、非単位ではあったが大学院演習を開設し、その取り組みを始めた。2004年度以降、正式な大学院科目(「人文科学の主要問題」(演習))として開設するようになり、主に歴史都市の災害に関する個人および共同の研究を進め、その成果²⁾も公表してきた。本稿はその一環として、2006年度に行われた研究の一部である。

II. 研究の方法

絵図の作成年代を検討する場合、2つの方法があると考えられる。1つ目は、作成年代が明確な絵図との対比を行い、内容的に同じような記載があれば、作成年代が比較的近いとみなす方法である。しかしこの方法には、既に存在した絵図を利用してその後必要事項を追加して作成した例がみられること、例えその時代に存在した事物でも意図的に記載しない場合があること、などの問題点が指摘される。2つ目は、年代を特定することのできる寺社の創建・廃止・移動に関する事象、屋敷の居住者の名称、庄屋の名称などの記載事項に焦点を絞り、史料などから直接的に年代を確定させる方法である。この場合にも上記と同様の問題点がない訳ではないが、複数の記載事項を検討することで、より正確な作成年代を求めることができるようになる。

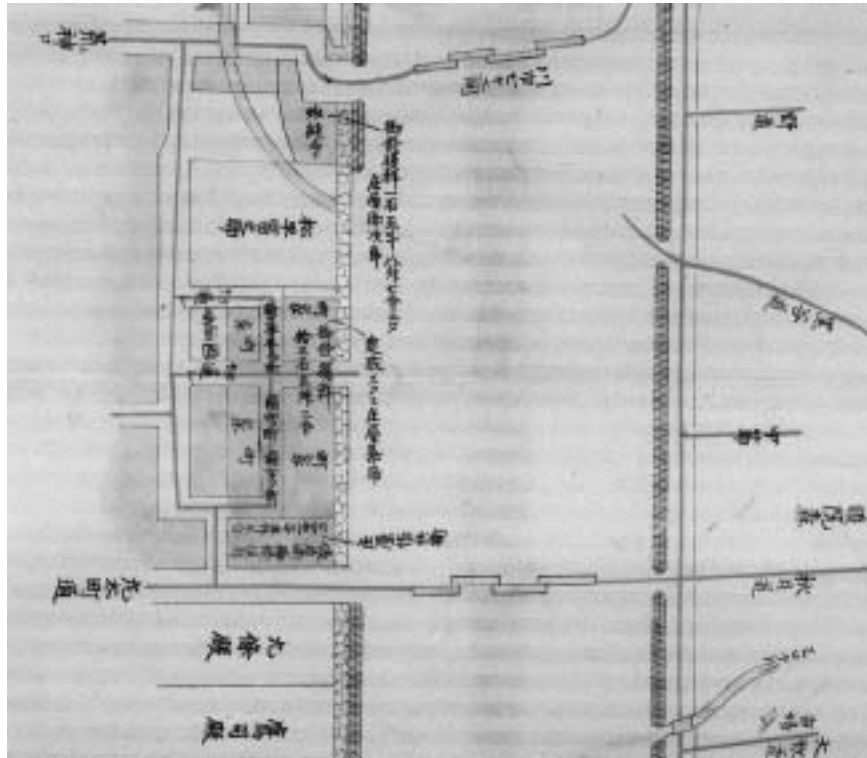
本稿では、この2つ目の方法に加えて、作成年代の判明している絵図なども参考に利用した。そのために用いた絵図は、賀茂別雷(上賀茂)神社所蔵の「加茂川図」³⁾、「加茂川図下」³⁾のほか、数葉の同時代の絵図なども加えた。

なお、本稿では鴨川に関して、数種類の表記を用いている。基本的には水系全体と高野川との合流点より下流部を鴨川、上流部を賀茂川と表記する。絵図には様々な表記が用いられているが、それらについては原題に「」をつけて表した。

III. 「賀茂川筋絵図」の概要

京都市立歴史資料館所蔵の「賀茂川筋絵図」は、19.4×261.5cmの大きさと、折本の形式になっていて、厚手の表紙に挟まれている。この絵図の由来は、蔵書印などから判断して京都のコレクター・杉浦丘園氏から伏見の古書店・若林春和堂を経て、地図のコレクターである大塚隆氏の手に渡り、京都市歴史資料館に寄贈されたもの

* 立命館大学文学部
** 立命館大学21世紀COEポスドク研究員
*** 立命館大学大学院文学研究科
**** 立命館大学大学院理工学研究科
***** 前期課程聴講生



第1図 「賀茂川筋絵図」
(京都市歴史資料館蔵)

であるという⁴⁾。この絵図は、数種類に彩色されており、色、文字、記号などの記載は詳細で、極めて完成度が高い。一部に虫食いがあるが、紙の状態がよく退色もあまりないことから、よい状態で保存されていたものと思われる。

記載されている範囲は、上賀茂付近から七条までであり、賀茂川および鴨川の周辺に限られている。絵図の中には、公儀石垣・町石垣、橋、道路、流入する河川・高瀬川などの水路、蛇籠、流作場、取水口、社寺、村、屋敷などの他、庄屋の名前、修復料の数値などが詳細に記載されている。鴨川の流路が薄く着色されているが、実際の位置とは考えられず、これは単なる記号的な意味しかもたない。一枚の細長い図幅におさめるために、方位が一部歪められている。また縮尺も、中下流部がほぼ一定であるのに対し、上流部で著しく小縮尺にされている。

なおその詳細については筆者が既に述べているので⁵⁾、ここでは触れない。

IV. 作成年代の検討

この絵図の作成年代を検討するにあたって、まず注目

したのは人名である。荒神口の橋の下流右岸（第1図）には、松平富之助と記した屋敷地（以下、屋敷という）がみえる。松平富之助とは、『新訂 寛政重修諸家譜』⁶⁾によると松平富之助資昌といい、延享2（1745）年に松平豊後守資訓の子として生まれた。8歳で松平本庄宮津家を相続し、浜松城主となっているが、14歳で丹後宮津城主に転封し、18歳で死去している。父親の松平豊後守資訓は、宝暦2（1752）年に浜松城主で死去する前に、寛延2（1749）年に短期間であるが京都所司代を勤めている。絵図に富之助という名前が使われているために、その作成年代はその誕生年である延享2（1745）年を遡ることはあり得ない。

そこで次に、他の絵図を用いて、この時代前後において、この場所にどのような表記がなされているか確認してみよう。宝永6（1709）年に作成された「新板増補京絵図」⁷⁾には、ここに「木ノ下いつ」（木下伊豆守か？）の屋敷があり、その少し南には松平美濃守の屋敷がみえる。それが寛保元（1741）年に作成された「増補再板京大絵図」⁸⁾には、松平伯耆守の屋敷になっている。賀茂別雷神社所蔵の「加茂川図」「加茂川図下」（明和9（1772）年作成）では、この場所に松平豊後守の名前が記載され

ている。次いで天明 6 (1786) 年に作成された「天明六年京洛中洛外絵図」⁹⁾には、松平豊後守の名前が、その北隣には妙経寺、南隣には圓通寺の表記がみられる。富之助の祖父である松平資俊が伯耆守になったのが正徳元 (1711) 年であるから、絵図と矛盾することはない。正徳元 (1711) 年から寛保元 (1741) 年の間にこの場所が松平家の屋敷になり、その後一定期間松平家がここを維持したと考えられる。

次に人名で注目したのは、庄屋の名前である。「賀茂川筋絵図」には、甚左衛門・又左衛門・勘助・源兵衛・長四郎など多くの庄屋の名前が御修復料や流作場に関連して記載されている。庄屋の名前は代々襲名する場合があることを考慮すると、それだけから時代を特定することは難しいが、史料で確認できる例を取り上げてみたい。『靈源寺文書』¹⁰⁾の元文 5 (1740) 年 2 月 30 日には寺域内の禁制に関する史料があり、その署名に他の庄屋・年寄とともに西賀茂川上村庄屋甚左衛門の名前がみえる。川上村は、位置的には絵図に甚左衛門と記載されているところ付近にあたる。仮に、この史料の甚左衛門と絵図の甚左衛門が同一人物ならば、年代的には元文 5 (1740) 年あたりとなる。なお、川上村の山側に描かれている靈源寺は、『靈源寺文書』によれば創建が寛文 13 (1673) 年ということがわかるので、「賀茂川筋絵図」の作成年代は、その年を遡らないことは明らかである。

次に、社寺の創建・廃止・移動などから絵図の作成年代の検討を加えてみたい。前述のように、松平富之助の屋敷のすぐ南には圓通寺が書かれている。現在の左京区岩倉には比叡山の借景で有名な円通寺があるが、両者には関係はない。『京都防目誌』¹¹⁾によれば、宝暦 6 (1756) 年に僧關通が開基したとある。圓通寺資料¹²⁾には、さらに詳細な記述がある。それによれば、寛延 2 (1749) 年に創建されたが、当時は転法輪寺といていた。その後、寺院が手狭になったので、現在の北区北野にあった圓通寺を譲り受け移転させ、鴨川河畔の現在地には圓通寺をもって来たという。『京都防目誌』からは、圓通寺がこの場所に来た年は判明しないが、圓通寺資料からその年代が宝暦 8 (1758) 年であることがわかることから、少なくとも「賀茂川筋絵図」はそれ以降の作成であることは疑いがない。なお、前述の「天明六年京洛中洛外絵図」には、圓通寺が書かれているので、この資料とは矛盾しない。

町名からも絵図の作成年代の検討が可能である。二條

橋の上流左岸に新生洲町が記載されている。この町は、『月堂見聞集』¹³⁾によれば、享保 18 (1733) 年にできたとされる。この記載があるということは、作成年代が 1733 年以前には遡らないことを意味する。

少ない人名や地名だけを根拠に作成年代を決めることは無理があるものの、複数の記載をあわせることで、有力で客観的な根拠になり得る。そのような観点から判断するとそこで、「賀茂川筋絵図」の作成年代は、圓通寺がこの場所にできた宝暦 8 (1758) 年以降、松平富之助の死亡年である宝暦 12 (1762) 年までの比較的短い間とみなしてほぼ間違いはないように考える。ただし、富之助の死後も多少この記載が残ったことを考慮しても、比較的短命であったためにそう長い間ではなかったと考える。

V. 災害とのかかわり

これまでの検討から、「賀茂川筋絵図」の作成年代は、宝暦 10 (1760) 年前後に絞り込まれた。つまり、これまで考えられていたよりも 90 年程度遅かったことが明らかにされた。この事実は、「賀茂川筋絵図」の作成目的についてもこれまでの考えを変えなければならなくなることを意味している。この絵図は「寛文新堤」の築造によってできた堤防や護岸の状態をあらわすものとして捉えることは間違っていないと考えるが、少なくとも「寛文新堤」築造の工事を直接表現したものではないことは確かである。そこで筆者らが注目したのが、絵図に赤く着色された部分と、御修復料の数値である。これは、幕府に対して、洪水の被害を受けた場所とその修復に要した(要する)費用の届けをあらわした絵図ではないかと考える。ただし、これが特定の洪水による修復を表すのか、あるいは日常的な修復を表すのかについては、今のところわかっていない。前述の「加茂川図」「加茂川図下」にも、御修復料の記載がみられるが、一部に同じ値がでてくる。「加茂川図」「加茂川図下」は、この「賀茂川筋絵図」に何らかのかかわりがあることは確かである。ただし、「加茂川図」「加茂川図下」には、「賀茂川筋絵図」にはない川幅や流路に関する詳しい記述があり、これについては別稿で考察する予定である。

なお、この絵図にある御修復料が、特定の洪水を表しているかどうかを、あまり前の時期でないと仮定して、期間を宝暦年間(元 (1751) 年～ 13 (1763) 年)に絞って検討してみた。『日本災害通志』¹⁴⁾には、宝暦 8 (1758)

6月に鴨川・淀川満水、10月19日に京都大雨、鴨川増水、三條大橋大破とある。『日本災異志』¹⁵⁾にも、宝暦6(1756)年9月16日の洪水と、10月4日の宇治の洪水がみられる。この期間に、ほかに鴨川では大きな洪水はなかったようである。宝暦8(1758)10月19日の元史料である『京都町触』¹⁶⁾にあたってみると、これは特定の洪水を表してはいないようで、鴨川筋でかなり頻繁に橋や堤防、蛇籠の破損・修復に関する史料があり、その一つであることがわかった。さらに、「賀茂川筋絵図」には三條大橋が被害をあらわす赤色で塗られていないことも指摘される。このように、絵図にある御修復料に相当する特定の洪水をみつけだすににくいことがわかった。特定の洪水に対する修復であるのか、日常的な修復であるのかについての検討は今後の課題としたい。

絵図の作成目的にまで十分に踏み込めなかったが、本稿で絵図作成年代を確定することができたのは、大きな成果であったと考える。

注

- 1) 伊東宗裕構成(1994)『京都古地図散歩』、別冊太陽、平凡社、144頁。
吉越昭久(1997)「近世の京都・鴨川における河川環境」、歴史地理学 39-1、72～84頁。
吉越昭久(1999)「京都・鴨川の「寛文新堤」に関する一考察」、岐阜地理 43、24～27頁。
吉越昭久(2004)『歴史時代の環境復原に関する古水文学的研究—京都・鴨川の河川景観の変遷を中心に—』、2002・2003年度立命館大学学術研究助成報告書、39頁など。
- 2) 共同研究によるものだけに限定：
京都歴史災害研究会事務局(2004)「文献目録(その1)」、京都歴史災害研究 1、27～89頁。
京都歴史災害研究会事務局(2004)「文献目録(その2)」、京都歴史災害研究 2、35～101頁。
京都歴史災害研究会事務局(2004)「史資料集」、京都歴史災害研究 2、105～130頁。
北 利史ほか(2005)「江戸時代初期の北野天満宮仕記録を用いた災害研究の可能性」、京都歴史災害研究 3、33～43頁。
京都歴史災害研究会事務局(2005)「文献目録(その3)」、京都歴史災害研究 3、47～73頁。
京都歴史災害研究会事務局(2005)「文献目録(その4)」、京都歴史災害研究 4、21～34頁。
片平博文ほか(2006)「京都における歴史時代の災害とその季節性」、京都歴史災害研究 6、1～8頁。
赤石直美ほか(2006)「京都歴史災害年表」、京都歴史災害研究 6、9～215頁。
赤石直美ほか(2006)「絵図を用いた近世京都の賀茂川の景観復原—明和九年作成の『加茂川図』を基礎として—」、2006年度人文地理学会大会発表(赤石直美ほか(2006)「絵図を用いた近世京都の賀茂川の景観復原—明和九年作成の『加茂川図』を基礎として—」、2006年度人文地理学会大会研究発表要旨、24～25頁)など。
- 3) この絵図の分析については、(財)京都国際文化交流財団によって撮影されたデジタル画像によった。賀茂別雷神社ならびに同財団に感謝する。
- 4) 京都市歴史資料館伊東宗裕氏の教示による。
- 5) 吉越昭久(1999)「京都・鴨川の「寛文新堤」に関する一考察」、岐阜地理 43、24～27頁。
吉越昭久(2007)「鴨川の堤防建設の真相」、人と水(人間文化機構) 2、16～19頁など。
- 6) 高柳光寿ほか編(1966)『新訂 寛政重集諸家譜 第21』、続群書類従完成会、401頁。
- 7) 大塚隆編(1994)『慶長・昭和京都地図集成』、柏書房、141頁。
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲7)
- 10) 「霊源寺文書」元文五年二月三十日、京都市編(1993)『史料 京都の歴史 第6巻 北区』611、121頁。
- 11) 碓井小三郎編(1968)「京都坊目誌 上巻之十七」『新修京都叢書』第19巻、臨川書店、610頁。
- 12) 圓通寺住職記載文書による。朝日新聞 2006. 12. 18朝刊にも同様の記事がある。
- 13) 「月堂見聞集」、享保十八年、京都市編(1985)『史料 京都の歴史 第8巻 左京区』613、103頁。
- 14) 池田正一郎(2004)『日本災変通志』、新人物往来社、746頁。
- 15) 小鹿島果編(1967)『日本災異志』、地人書館、875頁。
- 16) 京都町触研究会編(1984)『京都町触集成 第三巻』、岩波書店、480頁。
京都町触研究会編(1984)『京都町触集成 第四巻』、岩波書店、536頁。